

田辺開拓第2遺跡

Tanabekaitakudai2 Site

—鶴舎ならびに管理棟建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2015年3月

宮崎県都城市教育委員会

序

本書は、「鶴舎ならびに管理棟建設」に伴い都城市教育委員会が実施した田辺開拓第2遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書であります。今回の調査では、縄文土器・弥生土器・平安時代の土師器と田辺開拓期の烟跡が見つかっており、戦後の開拓事業の一端を垣間見ることができます。

本書が地域の歴史や文化財に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究資料として多くの方々に活用して頂けることを望んでいます。

最後になりましたが、発掘調査に御理解・御協力をいただいた、株式会社エビス商事様をはじめとする関係諸機関、発掘調査に従事していただいた市民の方々に対し、心より厚く御礼申し上げます。

2015年3月

宮崎県都城市教育委員会

教育長 黒木哲徳

例言

1. 本書は、「鶴舎ならびに管理棟建設」に伴い都城市教育委員会が平成25年度に実施した田辺開拓第2遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書で使用したレベル数値は海拔絶対高で、基準方位は真北である。
3. 現場における遺構実測は、発掘調査作業員の協力を得て、同文化財課主査近沢恒典・同主査中園剛史が行なった。本書に掲載した遺構・遺物の写真撮影は近沢・中園が行なった。遺物の実測及びトレースは整理作業員及び中園・同主査栗山葉子が行なった。土器の観察・分類は中園が行い、同主査栗山葉子・同主査山下大輔の助言・協力を得た。石器の観察・分類については中園が行い、栗山の助言・協力を得た。
4. 本書の遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・写真的番号は一致する。
5. 土層の色調は『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)2001年度前期版を参考にした。
6. 発掘調査で出土した遺物は都城市教育委員会で保管している。
7. 全ての記録(図面・写真)は都城市教育委員会で保管している。
8. 出土遺物の時期比定に関しては、以下の編年研究の成果を参考とした。
新東晃一 1989年 『早期九州貝殻文系土器様式』(『縄文土器大観Ⅰ 草創期 早期 前期』)
水ノ江和同・前追亮一 2010年 『各地域の土器編年 九州』(千葉 豊 『西日本の縄文土器 後期』)

本文目次

第1章 序説	1
第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 調査組織	1
第3節 調査の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 発掘調査の成果	6
第1節 基本層序	6
第2節 遺構	6
第3節 出土遺物	6
第4章 田辺開拓第2遺跡における自然科学分析	12
第1節 田辺開拓第2遺跡における植物珪酸体分析	12
第2節 田辺開拓第2遺跡における花粉分析	18
第5章まとめ	24

挿図目次

第1図 遺跡位置図	3
第2図 調査区位置図	4
第3図 調査区域図	4
第4図 調査区基本土層模式図	4
第5図 調査区土層断面図	7～8
第6図 調査区平面図（1区）	9
第7図 調査区平面図（2区）	9
第8図 出土遺物実測図	10
第9図 出土遺物実測図	11
第10図 1区南壁地点における植物珪酸体分析結果	15
第11図 2区東壁地点における植物珪酸体分析結果	16
第12図 1区南壁における花粉ダイアグラム	21

表目次

第1表 田辺開拓第2遺跡における植物珪酸体分析結果	14
第2表 田辺開拓第2遺跡における花粉分析結果	20
第3表 田辺開拓第2遺跡出土遺物観察表	25
第4表 田辺開拓第2遺跡出土遺物観察表	25

写真図版

図版1 田辺開拓第2遺跡の調査①	9
図版2 田辺開拓第2遺跡の調査②	27
図版3 出土遺物①	28
図版4 出土遺物②	29

第1章 序説

第1節 発掘調査に至る経緯

平成25年1月18日付で株式会社エビス商事より都城市高城町有水字田辺1955番61、62、63、64、78、150「廻舍ならびに管理棟」建設予定地における文化財の所在の有無について照会があった。これを受け都城市教育委員会は事業予定地内の踏査を行い、平成25年2月20日より平成25年2月22日にかけて確認調査を実施した。

確認調査結果を基に株式会社エビス商事、宮崎県教育委員会文化財課、都城市教育委員会文化財課により協議が進められ、工事施工により地下遺構等が影響を受ける部分（都城市高城町有水字田辺1955番63、64、78の一部）について、工事着手前に発掘調査を実施することで合意がなされ、平成25年7月2日付で「田辺開拓第2遺跡における埋蔵文化財の取り扱い等に関する協定書」が締結された。

協定締結に引き続き、平成25年7月2日付で「田辺開拓第2遺跡埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書」が締結され、7月29日より調査が開始された。調査対象面積は525m²である。

また、今回の調査区から南西に約100mの地点は前年度に同社の廻舎建設事業にともなった確認調査が行われた（都城市文化財調査報告書第110集「都城市内遺跡6」）。その際、縄文時代後期土器・石器等が出土し、堅穴状遺構4基が確認され、当該地一帯が縄文時代後期を中心とした集落の可能性があることが考えられている。

第2節 調査組織

田辺開拓第2遺跡の発掘調査組織は以下のとおりである。

平成25年度（発掘調査）

調査主体 宮崎県都城市教育委員会

調査責任者 教育長 酒匂謙以（～平成26年2月24日）
黒木哲徳（平成26年2月25日～）

調査事務局 教育部長 池田文明
文化財課長 新宮高弘
同副課長 松下述之
同主幹 栗畑光博

担当者 同主査 近沢恒典 同主事 中園剛史

補助 同主査 栗山葉子 同嘱託 早瀬航

庶務 同嘱託 松村美穂

発掘作業員 原田賀 上西政実 木上保 塩屋貴士 下津佐ミエ子 谷口清二 高尾和子 津曲節子
中原忠珍 抜追清美 吉盛五恵子

整理作業員 横尾恵美子

平成26年度（整理・報告書作成）

調査主体 宮崎県都城市教育委員会

調査責任者 教育長 黒木哲徳

調査事務局 教育部長 児玉貞雄
文化財課長 新宮高弘
同副課長 松下述之
同主幹 栗畑光博

担当者 同主事 中園剛史

補助 同主査 栗山葉子 同主査 近沢恒典 同主査 山下大輔

庶務 同嘱託 松村美穂（～平成26年4月） 畑中夏奈（平成26年6月～）

整理作業員 尾曲真貴 新徳より子 横尾恵美子

第3節 調査の経過

○発掘作業

発掘作業は平成25年7月29日の重機による表土掘削より開始し、9月13日に終了した。

調査方法

現表土層から田辺開拓当時の層（昭和21～34年 第二次大戦後）までを重機により除去した後、作業員の人力により遺構検出、遺構掘り下げを実施し、図面・写真等により状況を記録した。

記録図面の作成は近沢恒典・中園剛史が行った。土層断面図などは手測りで作成し、遺構平面図は写真測量と基準点（グリッド坑）及び補助点に設置したトータルステーションを使用し、放射法により測定。電子平板（「SITE XROSS」コンピュータ・システム株式会社）を用いて図化を行った。遺物の出土位置記録にもトータルステーションを用いた。また、自然科学分析を導入し、遺跡の総合的な把握に努めた。

調査の経過

調査区は段々畑に位置し、上部の畑を1区・下部の畑を2区とした。

7月29日：重機による1区・2区表土除去

7月31～8月2日：表土直下の耕作痕調査

8月6～9日：1区縄文～古代遺構検出

8月12～16日：1区断面図作成

8月20日：1区遺構調査

8月21～29日：1区ベルト土層図作成、遺構測量

8月23～9月5日：2区縄文～古代遺構検出

9月5～6日：遺構掘り下げ

9月6日：1区完掘

9月6～12日：2区遺構測量、遺構掘り下げ

9月12日：1区・2区自然科学分析試料採取、2区断面図作成

9月13日：2区完掘

調査に係る諸手続きは次のとおりに行った。

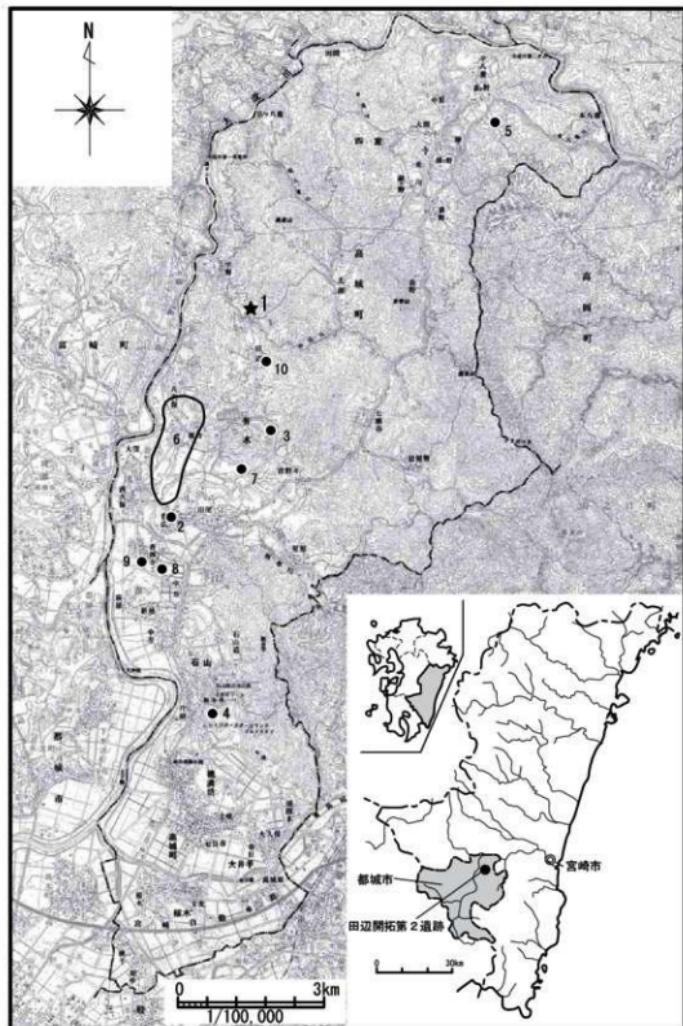
調査着手報告（平成25年8月5日付け都教文第388号・文化財保護法第99条第1項）

埋蔵物発見届（平成25年9月19日付け都教文第499号・文化財保護法第108条）

調査終了報告（平成25年10月7日付け都教文第581号）

○整理作業

出土遺物の水洗・注記・接合作業は平成25年度末から平成26年度にかけて文化財課1階整理作業室で行い、出土遺物の実測作業と報告書の執筆・編集は平成26年度に実施した。

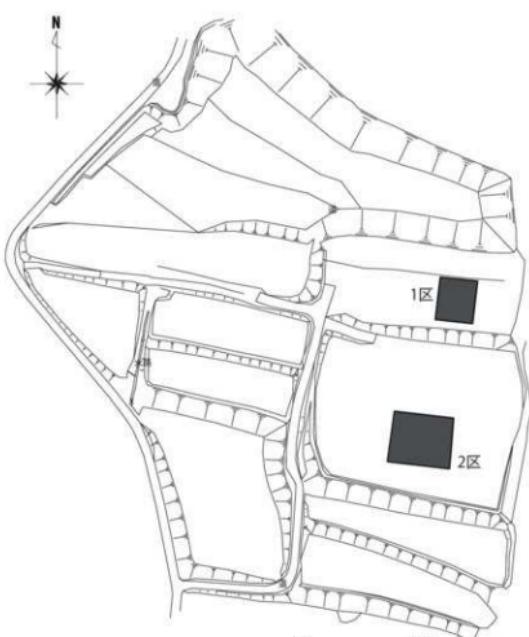


1:田辺開拓第2遺跡 2:豊広遺跡 3:久井ヶ野第1遺跡 4:城ヶ尾遺跡 5:雀ヶ野遺跡 6:細井地区遺跡群
7:高八重遺跡 8:高取原地下式横穴墓 9:香樟寺遺跡 10:田辺第3遺跡

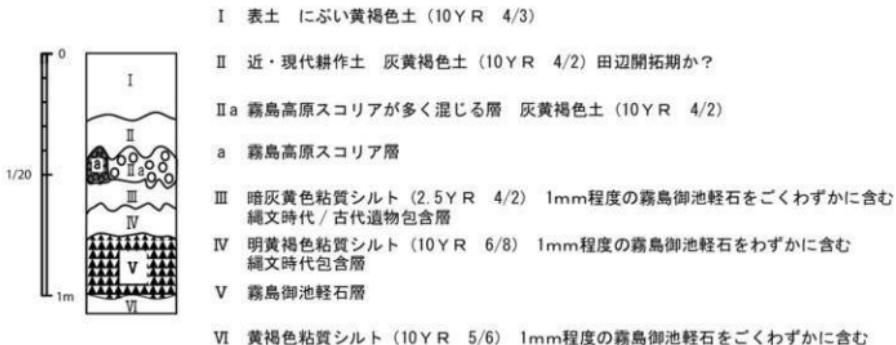
第1図 遺跡位置図 (S=1/100,000)



第2図 調査区位置図
0 200m
1/10000



第3図 調査区域図
0 40m
1/400



第4図 調査区基本土層模式図

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

都域盆地は霧島火山群と鶴塚山地との間に形成され、鹿児島湾や大隅半島と宮崎平野とのほぼ中間にあたり、盆地内を大淀川が北に貫流し、中央の低地を囲むように成層シラス台地群、シラス台地群が発達している。

都城市は東西25km、南北35km、面積約650㎢、周縁山地を含む盆地の大半を占め、人口規模は約17万人。中心市街地は盆地底南部に形成されている。

田辺開拓第2遺跡は、中心市街地から北東方向に約20km（旧北諸県郡高城町有水に位置）、高尾山（標高366.5m）の南麓、西約1kmに大淀川本流がながれ、大淀川支流の田辺川沿いに形成されたシラス台地面に立地し、北から南に傾斜する地形となっている。

第2節 歴史的環境

本遺跡周辺には、豊広遺跡、久井ヶ野第1遺跡、城ヶ尾遺跡、雀ヶ野遺跡群、細井地区遺跡群、高八重遺跡、高取原地下式横穴墓、香禅寺遺跡などが所在する。本調査区から南西へ約3km、葉たばこ反転土器事業に伴い確認調査が実施された豊広遺跡、久井ヶ野第1遺跡では、前者で焼練数点と炉穴1基、後者で陥り穴状遺構が確認されている。南へ約7km、ゴルフ場建設に伴い発掘調査が実施された城ヶ尾遺跡では縄文時代前期・後期・晚期、弥生時代後期、平安時代の遺構・遺物が確認されている。北東へ約7km、九州電力株式会社高城変電所建設に伴う発掘調査が実施された雀ヶ野遺跡では、縄文時代早期に位置する縄文土器、集石遺構46基、細石器、有舌尖頭器などが出土している。南西へ約2.5km、細井地区県営農地保全整備事業に伴う発掘調査が実施された細井地区遺跡群では、縄文時代・古墳時代の堅穴住居跡、10万点を超える遺物が出土している。南へ約3km、牛肥育舍建設地造成に先立つ遺跡発掘調査が実施された高八重遺跡では、土坑3基、集石遺構6基、縄文早期中葉～後葉を中心とする土器が確認されている。南西へ約5.5km、個人農地陥没に伴う埋蔵文化財発掘調査が行われた高取原地下式横穴墓は、年代的に古墳時代中期前半と位置づけられ、同時期の鉄劍・鐵鎌が複数確認された。同じく南西へ約5.5kmの香禅寺遺跡では、地下式石積石室や地下式横穴墓が確認されている。

高城町史によると田辺地区では、1952年に重信国重氏家の菜園で耕作中に縄文土器片が3点出土し、田辺分校主任であった西螺推進論が附近で磨製石斧を1点採集している。また、1970年頃田辺小学校に勤務していた立元久夫教諭により約30点の縄文土器片と磨製石斧2点、石匙1点を田辺川沿いとその斜面を切り拓いた耕地から採集している。2002年に実施された田辺第3遺跡の確認調査では、縄文時代早期及び後期の土器片、剥片が出土している。

前述したように前年度の田辺開拓第2遺跡内の鶴舎建設事業にともなった確認調査では縄文時代後期土器・石器・石錐・石製の装飾品等が出土し、縄文時代後期の堅穴状遺構4基と古代の墓跡が確認されている。

参考文献

- 高城町教育委員会 1989年『城ヶ尾遺跡』高城町文化財調査報告書 第1集
高城町教育委員会 2002年『町内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』高城町文化財調査報告書 第11集
高城町教育委員会 2004年『細井地区遺跡群』高城町文化財調査報告書 第14集
高城町教育委員会 2005年『雀ヶ野遺跡群』高城町文化財調査報告書 第18集
高城町教育委員会 2005年『高取原地下式横穴墓』高城町文化財調査報告書 第19集
高城町史編集委員会 1989年『高城町史』
都城市教育委員会 2006年『市内遺跡発掘調査』(旧高城町内遺跡発掘調査)
都城市文化財調査報告書 第73集
都城市教育委員会 2009年『高八重遺跡』都城市文化財調査報告書 第90集
都城市教育委員会 2013年『都城市内遺跡6』都城市文化財調査報告書 第110集

第3章 発掘調査の成果

第1節 基本層序

1区、2区にて観察された土層を相対的に再構成し、第4図に模式化した。表土剥ぎの段階で表土直下より耕作痕(耕起痕)と思われる遺構が検出された(II a層上面)。遺物が確認されたのは、III層(暗灰黄色粘質シルト)、IV層(明黄褐色粘質シルト)であり、古代の畠跡と思われる遺構が検出されたのはIII層(暗灰黄色粘質シルト)である。

第2節 遺構

第5図に調査区土層断面図、第6図・第7図に調査区平面図を掲載した。

当初はV層(霧島御池軽石層)上位の文化層(縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代)を調査対象としたが、重機による表土除去の段階で、表土直下のII a層上面より平面的に耕作痕(耕起痕)を検出したため、写真による記録保存を行った。耕作痕はほぼ規則的に東西方向へ畝状に伸びており、畝～畝の間隔は約20cm～40cmである。

1区西側壁面・南側壁面の観察では、古代の畠の畝状遺構と思われる回凸が確認できた。しかし、平面的には不規則な回凸は確認できたものの畝状遺構と断定できるものは検出できなかった。

第3節 出土遺物

第8図・第9図に遺物実測図を掲載した。

今回の調査では少量ではあるが、縄文早期から古代までの幅広い時代の土器が出土した。以下、個別にみていきたい。
縄文土器

1は加栗山式土器の胴部と思われ、貝殻条痕のうちに貝殻刺突文が施されている。今回の調査で唯一出土した縄文早期の土器である。2は口縁部で、外面に二条の平行沈線が施されていることから、指宿式土器と思われる。3は市来式土器口縁部で、内外に貝殻条痕が施され、上部には刻み目の沈線がみられる。4は市来式土器の胴部で、器面調整は内外に貝殻条痕がみてとれる。外面はやや磨耗している。5は市来式土器胴部で、内外に貝殻条痕が施され、一部にススが付着している。6は北久根山式土器の口縁部である。斜め方向に二条の沈線が確認できる。7は北久根山式土器の口縁部で、二条の沈線が交差している。胎土、色調、調整から6と同一個体ではないかと考えられる。8は胴部である。接合痕があり、内面に貝殻条痕が施される。9は口縁部で、4mm以下の小縫を含み、胎土から8と同類であると考えられる。10は外面に一条の沈線、内面にも沈線が施されている。11は剥落が著しく、胎土に黄色軽石を含んでいる。

弥生土器

12は弥生土器の甕で、口縁部が平坦であることから弥生時代中期の土器と思われる。

土師器

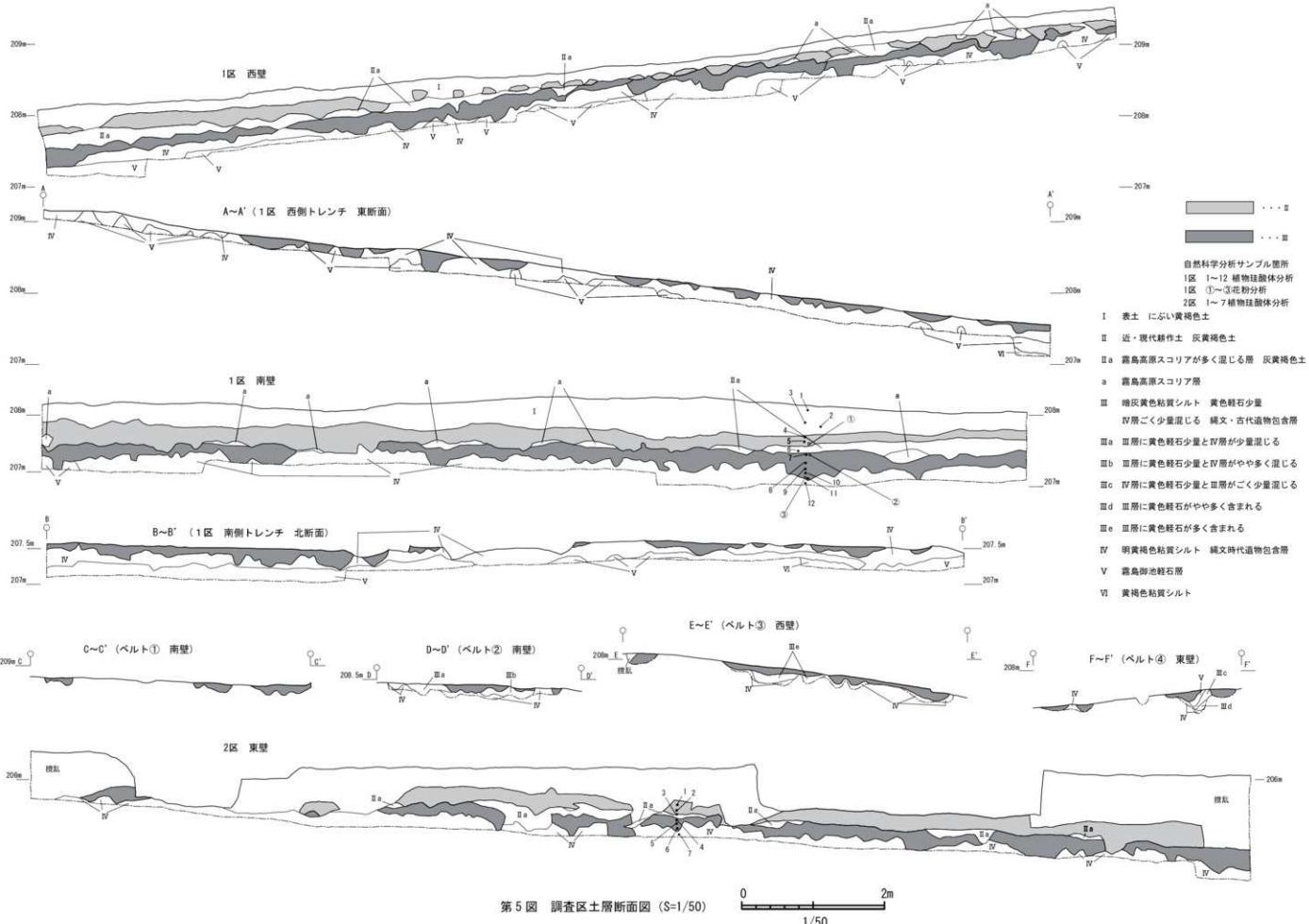
13は土師器の高台付甕である。底径は7.2cmである。14は土師器の甕で、平安時代のものではないかと考えられる。

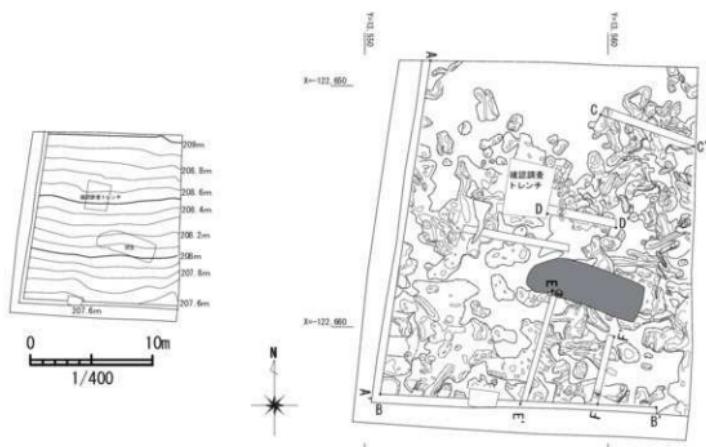
須恵器

15は須恵器の大甕胴部片である。外面に平行タタキ、内面に平行当て具痕のようなものがみられる。16は須恵器の大甕胴部片である。外面に平行タタキ、内面に平行当て具痕のようなものがみられる。17は須恵器で高台付坏である。内外に回転ナデが施され、口径は反転復元ではあるが、12.2cmである。

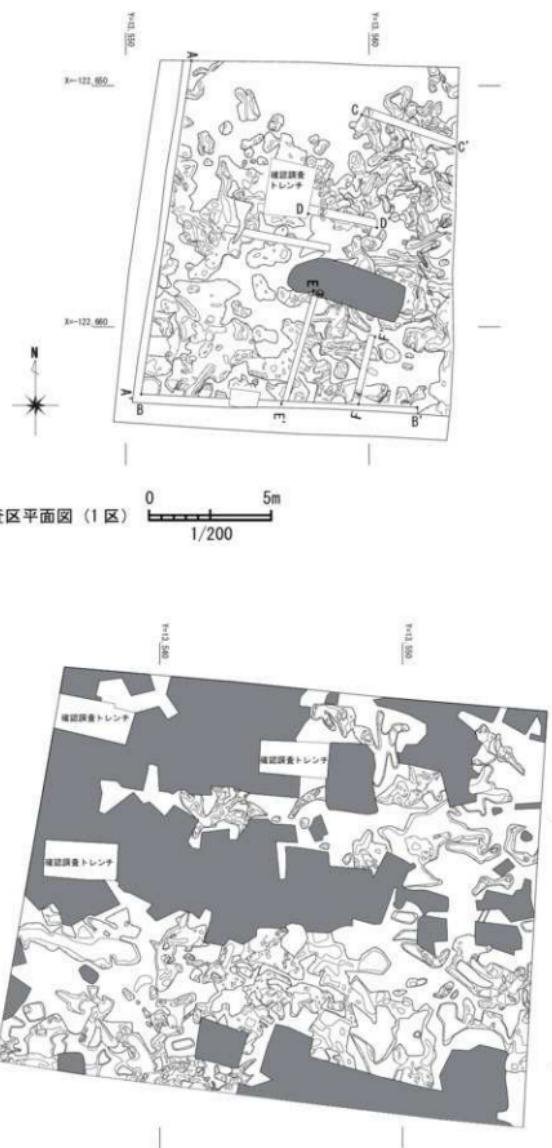
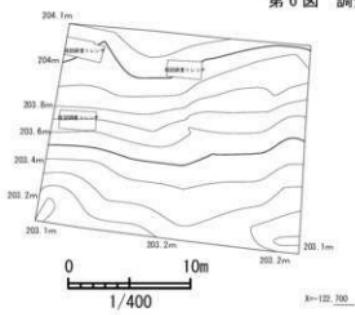
石器

18・19は敲石、20・21は剥片、22・23は打製石斧である。18は長さ9.8cm、幅7.5cm、厚さ4.5cm、重さ422gを測る。石材は砂岩である。19は長さ14.2cm、幅5.7cm、厚み3.7cm、重さ510gを測る。石材は砂岩である。20は長さ5.2cm、幅5.6cm、厚さ1.05cm、重さ50gを測る。石材は頁岩である。21は二次加工のある剥片で、長さ1.9cm、幅1.3cm、厚さ5mm、重さ1gを測る。石材は大分県姫島産の黒曜石である。22は長さ7.1cm、幅3.6cm、厚さ1.1cm、重さ40gを測る。石材はホルンフェルスである。23は長さ6.4cm、幅5.2cm、厚さ1.4cm、重さ50gを測る。石材は砂岩で、上部が欠損している。

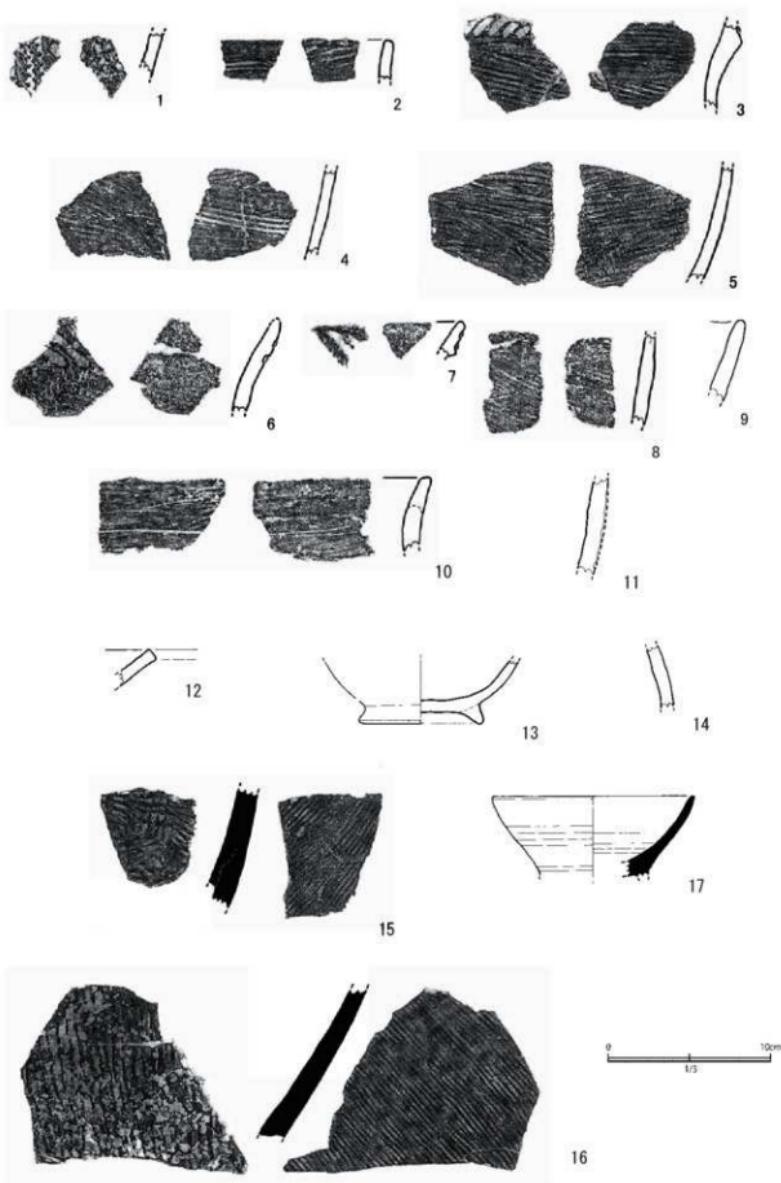




第6図 調査区平面図（1区）



第7図 調査区平面図（2区）



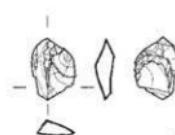
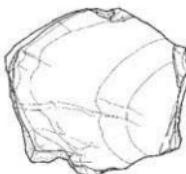
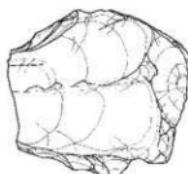
第8図 出土遺物実測図



18



19



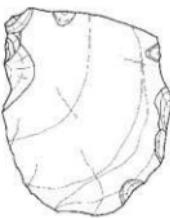
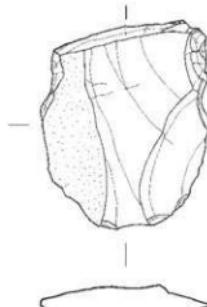
21



20



22



23

0
10cm
(18.19) 1/3

0
10cm
(20-21) 2/3

第9図 出土遺物実測図

第4章 田辺開拓第2遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

1. 自然科学分析の概要

田辺開拓第2遺跡の発掘調査では、霧島高原テフラ（Kr-Th）直下のⅢ層で岐状遺構が検出され、烟跡の可能性が指摘されていた。また、Kr-Thより上位のⅡ層についても、近現代の烟跡の可能性が指摘されていた。ここでは、当時の周囲の植生や環境および農耕等に関する情報を得る目的で、植物珪酸体分析および花粉分析を行った。

第1節 田辺開拓第2遺跡における植物珪酸体（プラント・オパール）分析

1.はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（ SiO_2 ）が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山、2000）。

2. 試料

分析試料は、1区南壁のⅠ層～Ⅳ層から採取された12点、2区東壁のⅡ層～Ⅳ層から採取された7点の計19点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。このうち、Ⅰ層は現表土、Ⅱ層は近現代の耕作土、Ⅱa層は霧島高原スコリア（Kr-Th、1235年）混層、Kr-Th直下のⅢ層は古代～縄文時代の遺物包含層、Ⅴ層は霧島御池テフラ（Kr-M、約4,600年前）とされている。なお、テフラ（火山灰）の名称や年代については、新編火山灰アトラス（町田・新井、2003）を参照した。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピース法（藤原、1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40μmのガラスピースを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42kHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピース個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピース個数に、計数された植物珪酸体とガラスピース個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山、2000）。

4. 分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および

び図1、図2に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、Aタイプ（くさび型）

[イネ科—タケ本科]

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属）、未分類等

[イネ科—その他]

表皮毛起源、棒状硅酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

[樹木]

ブナ科（シイ属）、ブナ科（アカガシ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、アワブキ科、その他

5. 考察

(1) 稲作跡の検討

稻作跡（水田跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。なお、畑稲作（陸稲栽培）の場合は、連作障害や地力の低下を避けるために輪作を行ったり休閑期間をおく必要があるため、イネの密度は水田跡と比較してかなり低くなり、1,000～2,000個/g程度である場合が多い（杉山、2000）。

1区南壁では、I層（試料1～3）からIV層（試料12）までの層準について分析を行った。その結果、現表土のI層（試料1～3）からイネが検出された。イネの密度は、1,300～3,200個/gと比較的低い値である。ここで検出されたイネについては、現在もしくは比較的最近の稲作に由来するものと考えられる。

2区東壁では、II層（試料1、2）からIV層（試料7）までの層準について分析を行った。その結果、II層（試料1、2）からイネが検出された。密度は1,900個/gおよび2,700個/gと比較的低い値であるが、II層は近現代の畑跡の可能性が指摘されていることから、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

(2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクヒエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

イネ科栽培植物の中には検討が不十分なものもあるため、キビ族型など他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の起源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

(3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群の検出状況と、そこから推定される植生・環境について検討を行った。Kr-Th直下のIII層ではススキ属型、ウシクサ族Aが多く検出され、キビ族型なども認められた。また、樹木起源のマンサク科（イスノキ属）が多く検出され、ブナ科（シイ属）、ブナ科（アカガシ属）、クスノキ科、アワブキ科なども認められた。Kr-Th混のIIa層からその上位のII層にかけては、ススキ属型やウシクサ族Aが増加し、マンサク科（イスノキ属）などの樹木起源は減少している。現表土のI層では、マンサク科（イスノキ属）などの樹木起源が再び増加している。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねススキ属型が優勢であり、I層ではイネも比較的多くなっている。

以上の結果から、Kr-Th直下のIII層の堆積当時は、ススキ属、ウシクサ族（チガヤ属など）を主体としてキビ族なども生育する日当たりの良い草原的な環境であったと考えられ、遺跡周辺にはシイ属、イスノキ属、クスノキ科、カシ類（アカガシ属）などの照葉樹林が分布していたと推定される。

Kr-Th 混の II a 層からその上位の II 層にかけては、何らかの原因でスキ属やチガヤ属などの草原が増加し、周辺の照葉樹林は減少したと考えられる。スキ属やチガヤ属は陽当たりの悪い林床では生育が困難であり、これらの草原が維持されるためには定期的な刈り取りや火入れ（焼き払い）が必要である（堀田、1991、近藤、1995）。このことから、当時は火入れなど人間による植生干渉が行われていた可能性が考えられる。また、このような植生環境下で土壤中に多量の有機物が供給され、炭素含量の高い黒色土壤（黒ボク土）が形成されたと考えられる（杉山ほか、2002）。

1 区南壁の II 層～ I 層では部分的に少量ながらマダケ属が認められた。タケ亜科のうちマダケ属にはマダケやモウソウチクなど有用なものが多く、建築材や生活用具、食用などとしての利用価値が高い。

6.まとめ

植物珪酸体分析の結果、1 区南壁の I 層（現表土）および2 区東壁の II 層（近現代）からイネが検出され、稲作が行われていた可能性が認められた。遺跡の立地や周辺の植生などから、ここで行われた稲作は畑作の系統（陸稲）であったと考えられる。なお、それ以外の層では、イネ、ムギ類、ヒエなどのイネ科栽培植物に由来する植物珪酸体は検出されなかった。

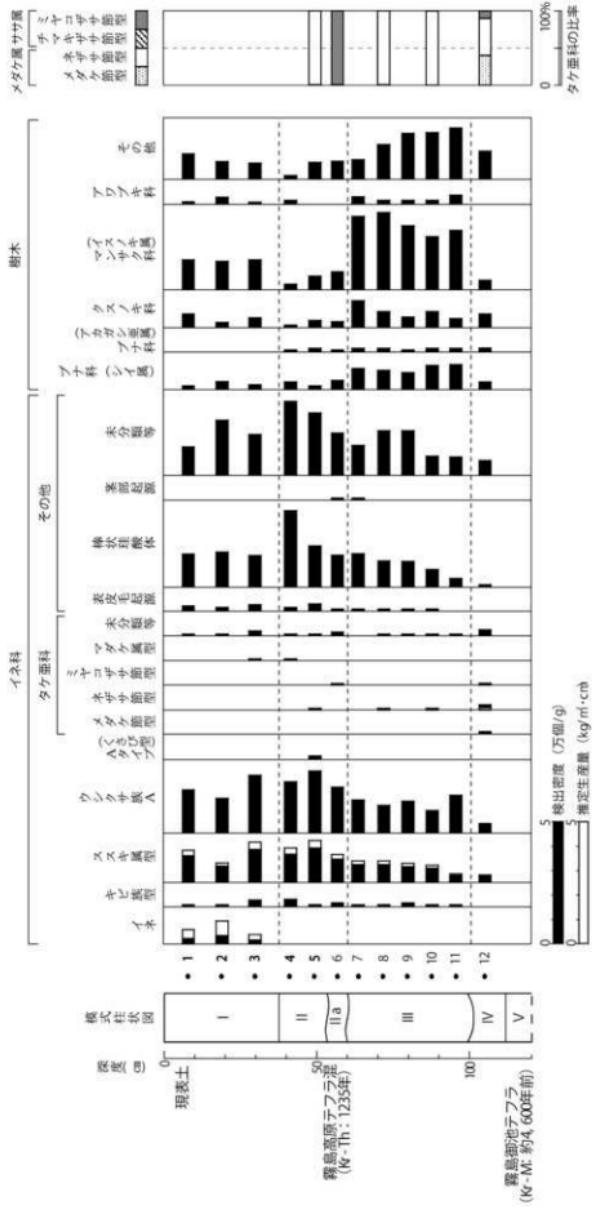
Kr-Th 直下の III 層の堆積当時は、スキ属、ウシクサ族（チガヤ属など）を主体としてキビ族なども生育する日当たりの良い草原的な環境であったと考えられ、遺跡周辺にはシイ属、イスノキ属、クスノキ科、カシ類などの照葉樹林が分布していたと推定される。Kr-Th 混の II a 層からその上位の II 層にかけては、人為的な影響など何らかの原因でスキ属やチガヤ属などの草原が増加し、周辺の照葉樹林は減少したと考えられる。また、II 層の時期には調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていたと推定される。

第 1 表 田辺開拓第 2 遺跡における植物珪酸体分析結果

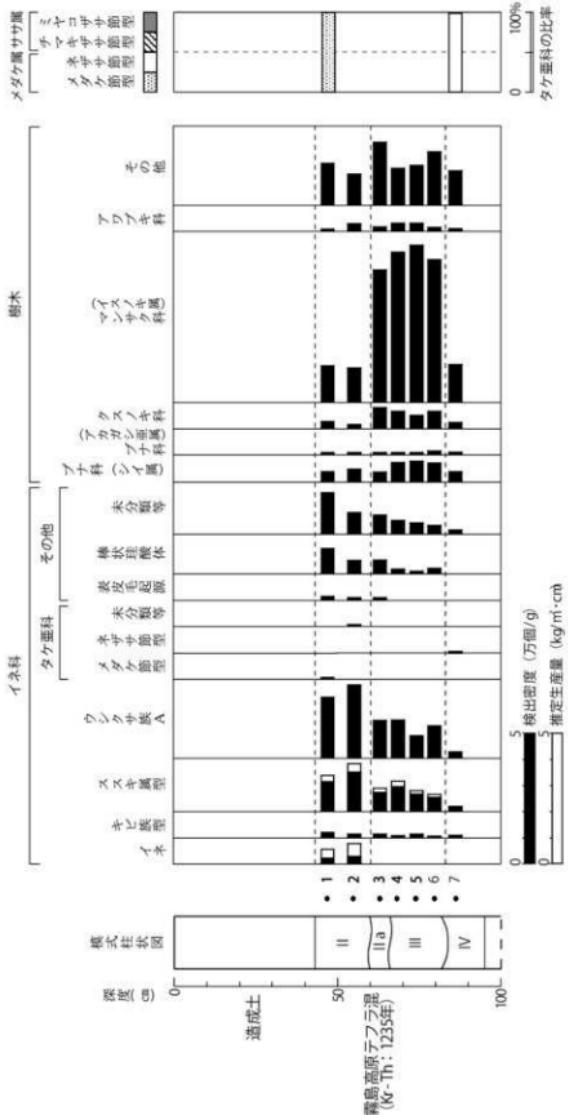
分類群	学名	地点・試料												1 II 層						2 II 層						
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
イネ科	<i>Gramineae</i>																									
イネ	<i>Oryza sativa</i>	20	32	13																	19	27				
セサミ属	<i>Polygonum type</i>	7	6	25	29	7	14	7	7	14	7	7								19	16	14	7	14	6	8
スキ属	<i>Miscanthus type</i>	107	64	134	115	140	93	71	70	62	86	27	23							113	130	72	94	64	52	15
クワ科直立A	<i>Ambrosia A type</i>	175	141	236	209	254	187	135	112	138	91	154	38							222	260	144	145	85	123	23
A タイプ(くさび型)	<i>A type</i>												15													
タケ科	<i>Bambusoideae</i>																									
メタセコイア	<i>Metasequoia var. Nipponicola</i>																			8	6					
モザガ属	<i>Platycladus var. Nensis</i>																			7	7	7	23			8
ミココザ属	<i>Sax var. Crassifolii</i>																			7						
マツケ属	<i>Phyllostachys</i>					6	7																			
未分類等	<i>Others</i>	7	6	19	7	7	14		7	7	7	7	23							7						
その他の禾本科	<i>Others</i>																									
表面毛根菌	<i>Hair hair origin</i>	20	13	25	14	27	7	7	7	7	7	7							13	7	7					
浮遊花粉	<i>Wind-shaped</i>	134	141	127	210	167	129	135	165	183	70	34	8						94	46	31	15	7	19		
草本花粉	<i>Stem origin</i>							7	7																	
未分類等	<i>Others</i>	114	224	166	302	254	172	121	181	144	77	74	60						157	82	72	51	42	32	15	
樹木花粉	<i>Araucaria</i>																									
ブナ科(シイ属)	<i>Carpinus</i>	15	32	19	29	13	36	35	27	68	96	101	30						38	48	36	73	78	21	38	
ブナ科(カガシ属)	<i>Quercus vulgaris, Coccinea</i>					7	13	7	14	14	7	14	12	15					6	7	7	7	7	13	8	
クヌク属	<i>Loropetalum</i>	54	19	38	7	27	22	197	63	41	63	34	53						25	14	79	65	58	65	23	
マンサク科(イソノキ属)	<i>Zizaniopsis</i>	121	115	121	22	54	72	298	314	260	217	242	36						130	130	365	374	461	546	144	
アブチ科	<i>Selaginella</i>	7	26	6	14			28	14	14	14	34						6	27	14	29	28	13	8		
その他	<i>Others</i>	161	70	64	14	67	72	78	140	185	189	200	112						157	116	228	130	149	201	129	
植物珪酸体合計	Total	879	889	1000	1057	1056	829	1094	1117	1040	916	933	437						3020	958	1282	1196	1122	1142	614	

おもな分類別の検定生産量（単位：kg/m²/yr）：試料の検出率を1.0と假定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.19	0.94	0.37																				0.55	0.98
スキ属	<i>Miscanthus type</i>	1.35	0.79	1.66	1.43	1.74	1.16	0.88	0.87	0.76	0.69	0.33	0.28						1.49	1.87	0.90	1.17	0.79	0.64	0.19
メタセコイア	<i>Metasequoia var. Nipponicola</i>																		0.09	0.07					
モザガ属	<i>Platycladus var. Nensis</i>																								
ミココザ属	<i>Sax var. Crassifolii</i>																								

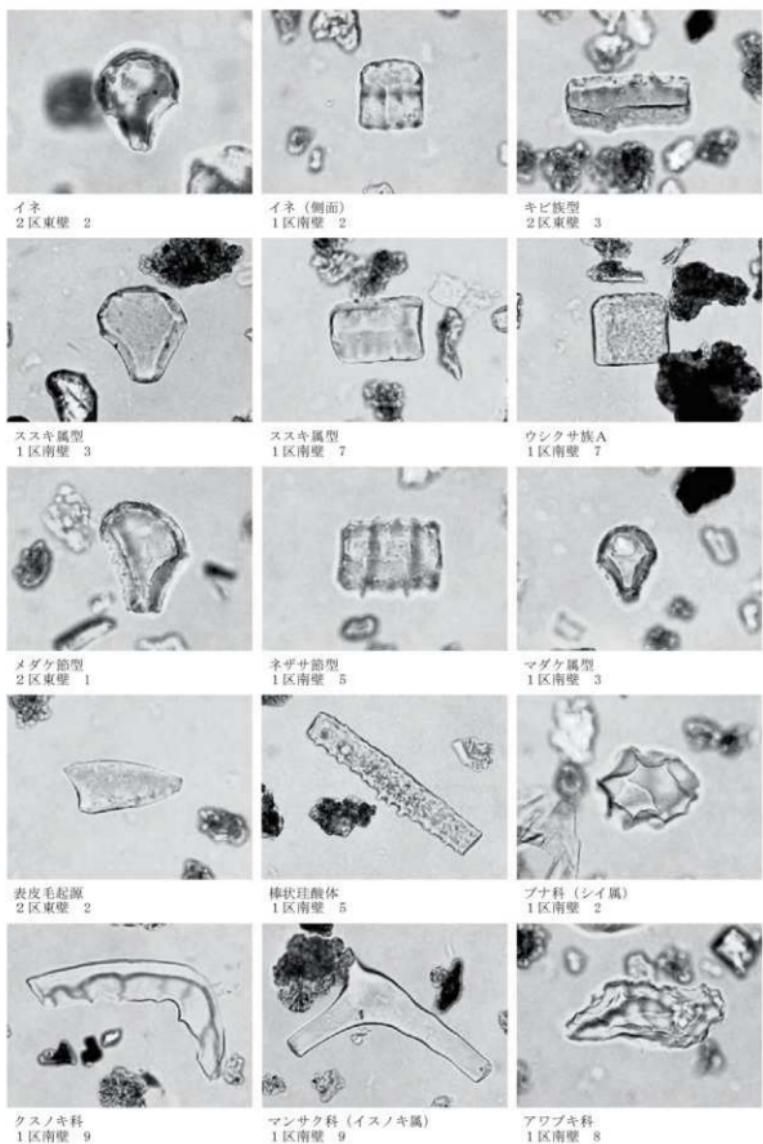


第10図 1区南壁地点における植物珪酸体分析結果



第11図 2区東壁地点における植物珪酸体分析結果

田辺開拓第2遺跡の植物珪酸体 (プラント・オバール)



— 50 μ m —

第2節 田辺開拓第2遺跡における花粉分析

1.はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの有機質遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

分析試料は、1区南壁のⅡ層とⅢ層から採取された計3点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3. 方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から 1 cm³ を秤量
- 2) 0.5% リン酸三ナトリウム (12 水) 溶液を加えて 15 分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mm の篩で砾などの大きな粒子を取り除き、沈殿法で砂粒を除去
- 4) 25% フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトトリル処理（無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎）を施す
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300 ~ 1000 倍を行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。

4. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉 11、樹木花粉と草本花粉を含むもの 2、草本花粉 8、シダ植物胞子 2 形態の計 23 である。なお、寄生虫卵は認められなかった。分析結果を表 2 に示し、花粉数が 100 個以上計数された試料については花粉総数を基準とする花粉ダイアグラムを示した（図 3）。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、カバノキ属、ハシバミ属、クリ、シイ属—マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、サンショウ属、ニシキギ科、ハイノキ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科—イラクサ科、マメ科

〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、アカザ科—ヒユ科、アブラナ科、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

单条溝胞子、三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

Ⅲ層下部（試料 3）では、花粉密度が低く、シダ植物胞子の占める割合が 59%、樹木花粉が 29%、草本花粉が 12% である。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、シイ属—マテバシイ属が優勢で、クリ、コナラ属コナラ亜属などが伴われる。草本花粉ではイネ科が優勢で、ヨモギ属、アブラナ科などが伴われる。Kr-Th 直下のⅢ層上部（試料 2）では、

クリ、コナラ属アカガシ亜属、イネ科、ヨモギ属などが検出されたが、いずれも比較的少量である。II層（試料1）では、草本花粉の占める割合が53%、シダ植物胞子が33%、樹木花粉が14%である。草本花粉ではヨモギ属、イネ科が優勢で、カヤツリグサ科、キク亜科、アブラナ科などが伴われる。樹木花粉では、クリ、シイ属一マテバシイ属、マツ属複維管束亜属、スギ、コナラ属アカガシ亜属などが認められた。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

III層下部の堆積当時は、イネ科、ヨモギ属、シダ植物、アブラナ科などが生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられ、遺跡周辺にはカシ類（コナラ属アカガシ亜属）、シイ類（シイ属一マテバシイ属）などの照葉樹林をはじめ、二次林とみられるクリ、ナラ類（コナラ属コナラ亜属）などが分布していたと推定される。霧島高原スコリア（Kr-Th, 1235年）直下のIII層上部では、花粉密度が低いことから植生や環境の推定は困難であるが、III層下部とおおむね同様の状況であった可能性が考えられる。花粉があまり検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

Kr-Thより上位のII層の堆積当時は、ヨモギ属、イネ科、シダ植物、アブラナ科などが生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられ、周辺地域にはカシ類、シイ類などの照葉樹林をはじめ、クリ、マツ類（クロマツ・アカマツ）、スギなどが分布していたと推定される。

今回の分析では、III層やII層における畑作物の検出が期待されたが、これを示唆するような明瞭な結果は得られなかった。なお、各層で認められたアブラナ科には、アブラナ（ナタネ）、ダイコン、ハクサイなど多くの栽培植物が含まれるが、花粉の密度が低いことから畑作との関連性は不明である。

花粉分析では、植物珪酸体分析で検出されたクスノキ科が認められないが、クスノキ科は花粉壁が完全には保存されないことから花粉分析では把握されないという問題がある。

IV. 自然科学分析のまとめ

田辺開拓第2遺跡において、植物珪酸体分析および花粉分析を行った。霧島高原テフラ（Kr-Th, 1235年）直下のIII層の堆積当時は、イネ科（ススキ属やチガヤ属など）、ヨモギ属、シダ植物、アブラナ科などが生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられ、遺跡周辺にはカシ類、シイ類、イスノキ属、クスノキ科などの照葉樹林をはじめ、二次林とみられるクリ、ナラ類などが分布していたと推定される。

Kr-Thより上位のII層（近現代）では、2区東壁でイネの植物珪酸体が検出され、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が認められた。遺跡の立地や周辺の植生などから、ここで行われた稲作は畑作の系統（陸稲）であったと考えられる。この時期には人為的な影響など何らかの原因でイネ科（ススキ属やチガヤ属など）、ヨモギ属などの草原が増加し、カシ類、シイ類、イスノキ属、クスノキ科などの照葉樹林は減少したと推定される。また、このような植生環境下で土壤中に多量の有機物が供給され、炭素含量の高い黒色土壌（黒ボク土）が形成されたと考えられる。

文献

- 金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p. 248-262。
- 近藤錬三（1995）日本における植物珪酸体研究とその応用。近堂祐弘教授退官記念論文集刊行会：p. 31-56。
- 島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集、60p。
- 杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として一、考古学と自然科学、19, p. 69-84。
- 杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史。第四紀研究、38(2), p. 109-123。
- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オーバール）。考古学と植物学。同成社、p. 189-213。
- 杉山真二・渡邊眞紀子・山元希里（2002）最終氷期以降の九州南部における黒ボク土発達史。第四紀研究、41(5), p. 361-373。

中村純 (1967) 花粉分析、古今書院、p. 82-110.

中村純 (1980) 日本産花粉の標識、大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p.

藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) -数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法-、考古学と自然科学、9、p. 15-29.

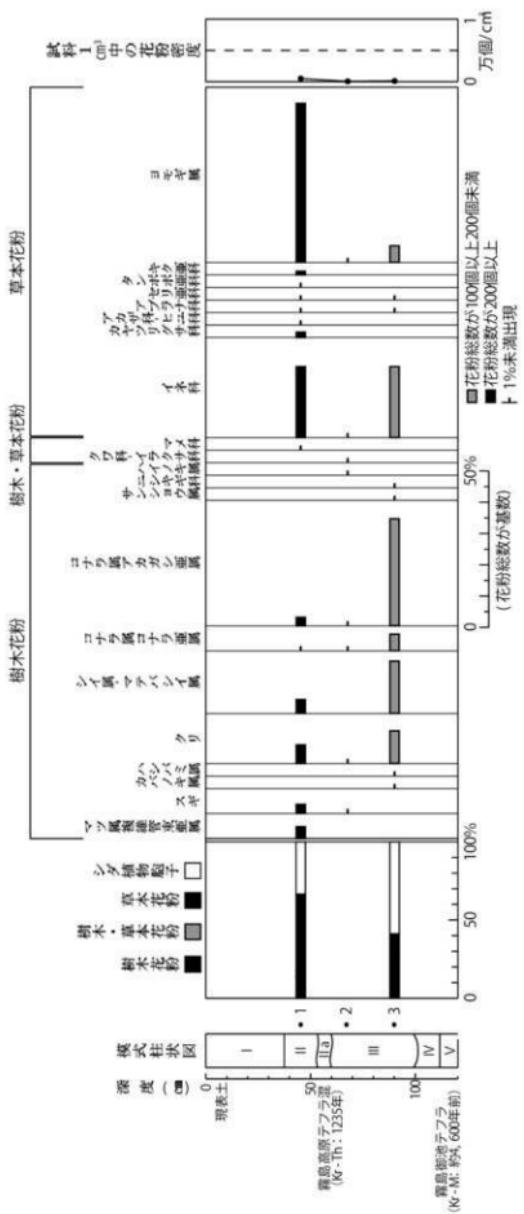
藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) -プラント・オパール分析による水田址の探査-、考古学と自然科学、17、p. 73-85.

坂田満 (1991) 日本列島の植物、カラー自然ガイドII、保育社:p. 68-69.

町田洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス-日本列島とその周辺-、東京大学出版会、336p.

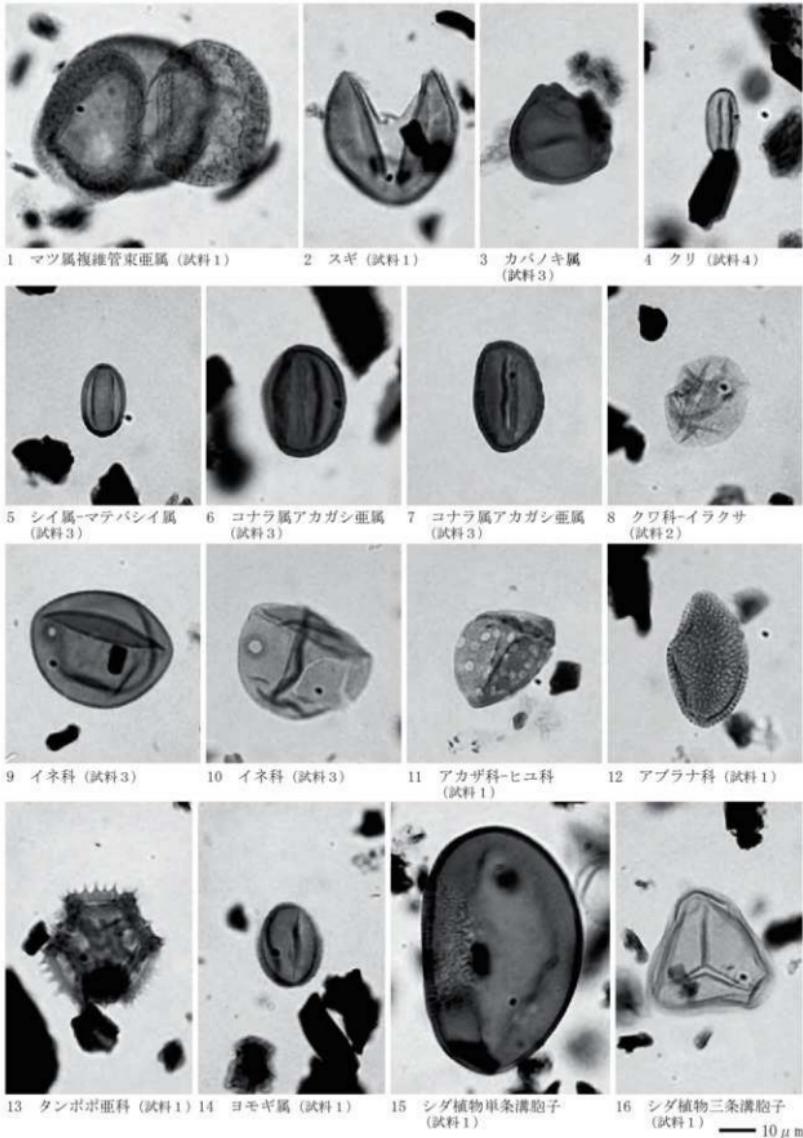
第2表 田辺開拓第2遺跡における花粉分析結果

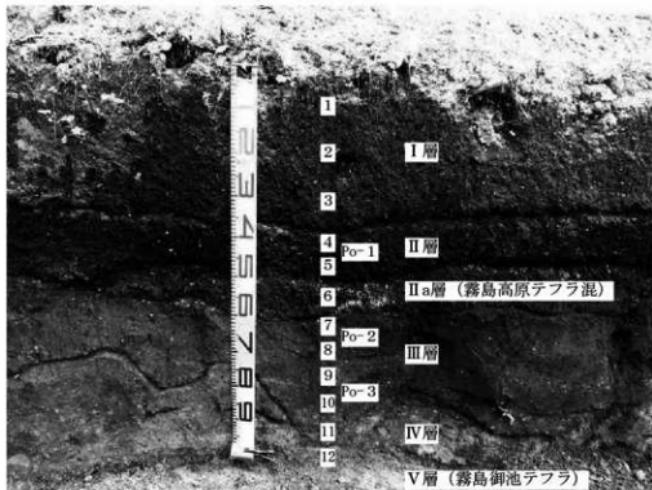
学名	和名	1区南壁		
		1	2	3
Arboreal pollen	樹木花粉			
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複管束亞属	13		
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	10	1	
<i>Betula</i>	カバノキ属			1
<i>Corylus</i>	ハシバミ属			1
<i>Castanea crenata</i>	クリ	20	12	12
<i>Castanopsis-Pasanina</i>	シイ属-マテバシイ属	15		19
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亞属	2	2	6
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亞属	9	12	39
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウウ属			1
Celastraceae	ニシキギ科			1
<i>Symplocos</i>	ハイノキ属		1	
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木・草木花粉			
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イクラクサ科		1	
Leguminosae	マメ科	1		
Nonarboreal pollen	草木花粉			
Gramineae	イネ科	75	17	26
Cyperaceae	カヤツリグサ科	6		
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	1		
Cruciferae	アブラナ科	1		1
Aipoideae	セリ酢酸科	3		
Lactucoideae	タンボボアヤ科	3		
Asteroideae	キク亞科	4		
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	168	12	6
Fern spore	シダ植物胞子			
Monocolpate spore	單溝胞子	8	24	115
Trilete type spore	三条溝胞子	158	58	46
Arboreal pollen	樹木花粉	69	28	80
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木・草木花粉	1	1	
Nonarboreal pollen	草木花粉	261	29	34
Total pollen	花粉総数	331	58	114
Pollen frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の花粉密度	4.9	3.8	8.9
		×10 ³	×10 ²	×10 ²
Unknown pollen	未定花粉	7	5	13
Fern spore	シダ植物胞子	166	82	161
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)
Stone cell	石細胞	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)
Charcoal · woods fragments	微細炭化物・微細木片	(++)	(++)	(+)



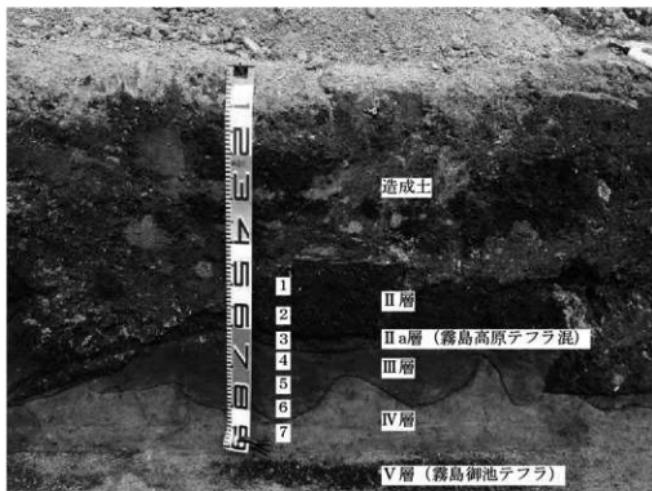
第12図 1区南壁における花粉ダイアグラム

田辺開拓第2遺跡の花粉・胞子
1区南壁





1 区南壁



2 区東壁

田辺開拓第2遺跡における試料採取箇所

第5章　まとめ

調査区は田辺川沿いに形成されたシラス台地面に立地し、第6図・第7図のV層（霧島御池軽石層）上面のコンターラインからみると、北側から南にかけて1区は約1.3m、2区は約1mの比高差がある。今回の調査では当初、V層上位の文化層（縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代）を調査対象とした。

縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代…遺構と断定できるものは検出されなかつた。しかしながら、前年度に実施された確認調査の結果や過去の調査区近辺での遺物の表採状況及び今回の調査での遺物の出土状況を考慮すると、調査区近辺で何らかの活動が行われていた可能性は完全には否定できない。また、田辺開拓期に大規模な農地開拓が行われていたことも考えると、調査区近辺が近現代に擾拌されている可能性がある。遺物としては、a層（霧島高原スコリア層）1235年（奥野充, 2002）以降のⅡ層より縄文土器が4点（加栗山式土器胴部1点・市来式土器1点・北久根山式土器1点・型式不明土器1点）が出土したが、流れ込みなどの二次的な要因が考えられる。また、Ⅲ層より縄文土器が4点（指宿式土器1点・市来式土器1点・型式不明土器2点）、土師器甕1点、須恵器大甕1点、石斧1点、礫石1点、Ⅲ・Ⅳ層より北久根山式土器が1点出土した。

田辺開拓期…畑跡と思われる耕作痕（耕起痕）を平面的に確認できた。遺物は確認できなかつたが、耕作痕（耕起痕）を調査区壁面で観察すると、a層（霧島高原スコリア層）1235年（奥野充, 2002）以降の層で、現表土直下に堆積し、中世～近現代の耕作土層の可能性が高い。高城町史・宮崎県開拓史によると、当該地では、戦後の食料増産と失業人口の改善を目的とした国の政策により、昭和21年10月から開拓事業が始まられており、年次別農作物収穫状況から陸稲作が行われていることが把握できる。また、自然科学分析の結果からみても、当該期に調査区近辺で定期的な刈り取りや火入れ（焼き払い）・陸稲作が行われていた可能性が指摘されている。これらのことを総合的に判断すると、表土直下の耕作痕（耕起痕）は田辺開拓期のものと考えられる。

参考文献

- 奥野充 2002年 『南九州に分布する最近3万年間のテフラの年代学的研究』
新東晃一 1989年 『早期九州貝殻文系土器様式』（「縄文土器大観Ⅰ 草創期 早期 前期」）
日本考古学協会 『はたけの考古学』 日本考古学協会 2000年度鹿児島大会資料集 第1集
高城町史編集委員会 1989年 『高城町史』
水ノ江和同・前迫亮一 2010年 『各地域の土器編年 九州』（千葉 豊 『西日本の縄文土器 後期』）
都城市教育委員会 2013年 『都城市内遺跡6』都城市文化財調査報告書 第110集
宮崎県 1981年 『宮崎県開拓史』

第3表 田辺開拓第2遺跡出土遺物観察表

相場 番号	出土 層位	種別	型式	部位	口径	底径	法量 (cm)	手法・調査・文様注記		内面	外側	色調	胎土の特徴	備考
								貝殻系	ナデ (焼)					
1	I層	縫合土器	加賀山式	周部				貝殻系		赤褐色 (5YR8/4)	赤褐色 (5YR8/4)	石英・長石・角閃石	織文早期	
2	II層	縫合土器	指輪式	口縁部				ナデ 沈縮割り		明赤褐色 (5YR7/4)	明赤褐色 (5YR7/4)	石英・長石	織文後期	
3	II層	縫合土器	市来式	口縁部				貝殻系 脱臼目		明赤褐色 (5YR7/4)	明赤褐色 (5YR7/4)	石英・長石	織文後期	
4	III層	縫合土器	市来式	周部				貝殻系		明赤褐色 (5YR7/4)	明赤褐色 (5YR7/4)	石英・長石	織文後期	
5	II層	縫合土器	市来式	周部				貝殻系		明赤褐色 (5YR7/4)	明赤褐色 (5YR7/4)	石英・長石	織文後期	
6	III・IV層	縫合土器	北久根山式	口縁部				ナデ 沈縮	ナデ	明赤褐色 (5YR7/4)	明赤褐色 (5YR7/4)	3mm 以下の小瘤を含む	織文後期	
7	II層	縫合土器	北久根山式	口縁部				ナデ 沈縮	ナデ	明赤褐色 (5YR7/4)	明赤褐色 (5YR7/4)	2mm 以下の小瘤を含む	織文後期	
8	I層	縫合土器	周部					貝殻系		明赤褐色 (5YR7/4)	明赤褐色 (5YR7/4)	黒・白色		
9	II層	縫合土器	周部	口縁部				ナデ	ナデ	明赤褐色 (5YR7/4)	明赤褐色 (5YR7/4)	4mm 以下の瘤物を含む		
10	I層	縫合土器	周部	口縁部				ナデ 沈縮	ナデ 沈縮	明赤褐色 (5YR7/4)	明赤褐色 (5YR7/4)	4mm 以下の小瘤を含む		
11	II層	縫合土器	周部					ほぼ剥離		明赤褐色 (5YR7/4)	明赤褐色 (5YR7/4)	2mm 以下の小瘤を含む		
12	II層	労生土器	口縁部					ナデ	ナデ	明赤褐色 (5YR7/4)	明赤褐色 (5YR7/4)	石英・角閃石		
13	II層	土器	土器	周部			(7.2)		ナデ	明赤褐色 (5YR7/4)	明赤褐色 (5YR7/4)	2mm 以下の小瘤を含む	反転復元	
14	2区	土器	土器	周部				ナデ	ケズリのナデ	明赤褐色 (5YR7/4)	明赤褐色 (5YR7/4)	赤褐色の瘤物を含む	平安時代	
15	2区	土器	土器	周部				平行	平行	明赤褐色 (5YR7/4)	明赤褐色 (5YR7/4)	5mm 以下の小瘤を含む	接合痕あり	
16	2区	土器	土器	周部				平行	平行	明赤褐色 (5YR7/4)	明赤褐色 (5YR7/4)	4mm 以下の黒色の瘤物を含む	接合痕あり	
17	2区	漆器	漆器	口縁部～ 底部			(12.2)	回転ナデ	回転ナデ	明赤褐色 (5YR7/4)	明赤褐色 (5YR7/4)	2mm 以下の瘤物を含む	反転復元	

第4表 田辺開拓第2遺跡出土遺物観察表

相場 番号	出土 層位	種別	器種	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	石材		備考
								石材	砂岩	
18	I層	石器	敲石	9.8	7.5	4.5	422	砂岩		
19	II層	石器	敲石	14.2	5.7	3.7	510	砂岩		
20	2区 IV層	石器	剥片	5.2	5.6	1.05	50	頁岩		
21	II層	石器	剥片	1.9	1.3	5	1	緑島産雲母石		二次加工のあら剥片
22	2区 I層	石器	石片	7.1	3.6	1.1	40	ホルンフェルス		
23	II層	石器	石片	(6.4)	5.2	1.4	50	砂岩		

図版1 田辺開拓第2遺跡の調査①



田辺開拓第2遺跡遠景（南方向より）



1区全景（南東方向より）



2区全景（東方向より）



1区南壁 堆積状況



2区東壁 堆積状況

図版2 田辺開拓第2遺跡の調査②



1区田辺開拓期窯跡（北西方向より）



遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況

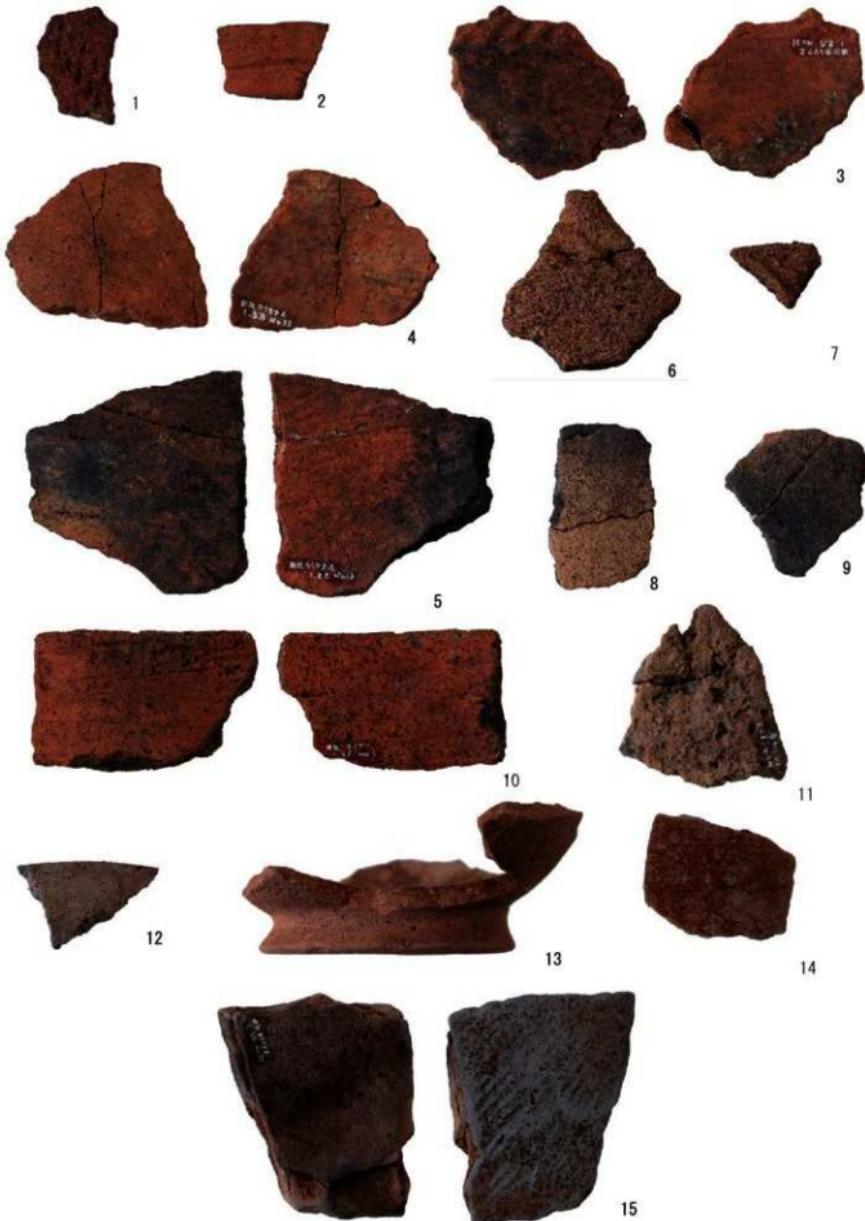


遺物出土状況

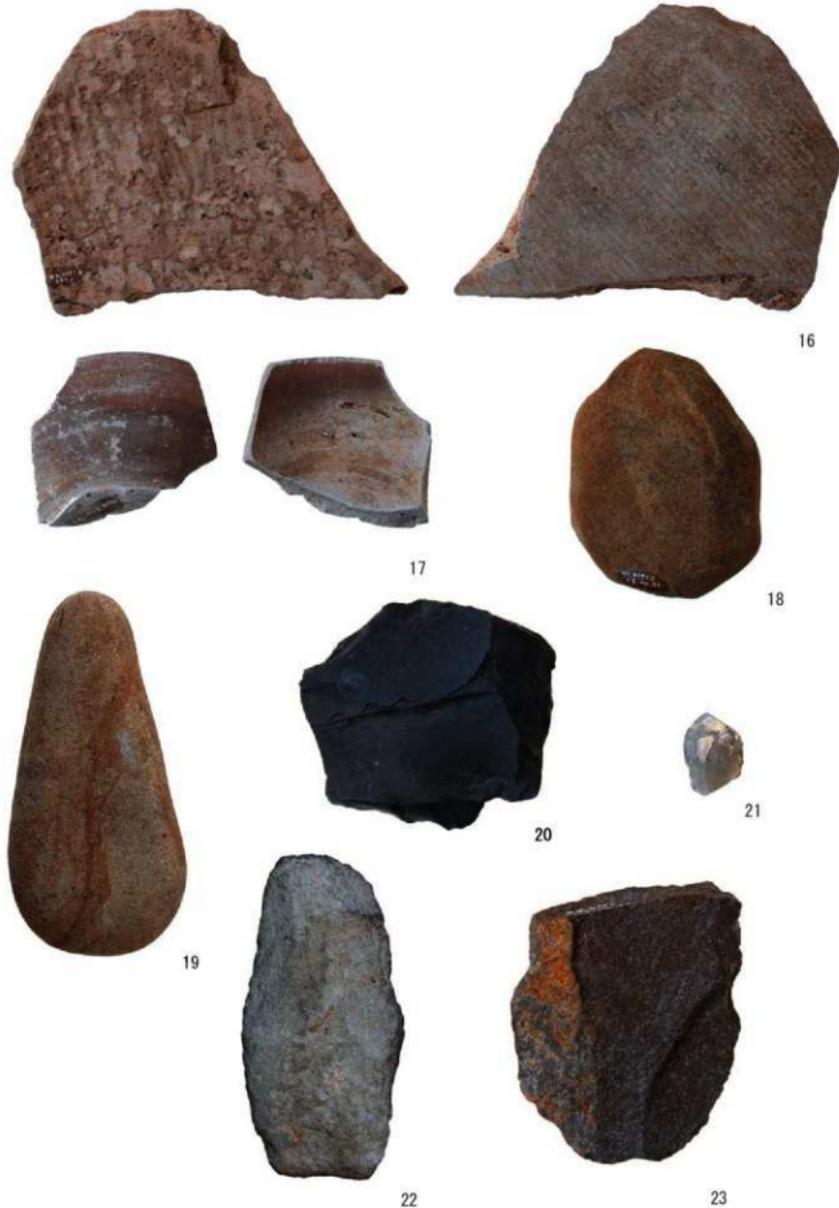


田辺開拓之碑

图版3 出土遗物①



图版4 出土遗物②



報告書抄録

ふりがな	たなべかいたくだい2いせき						
書名	田辺開拓第2遺跡						
副書名	「鶏舎ならびに管理棟」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	都城市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第 117 集						
編著者名	中國剛史						
編集機関	都城市教育委員会						
所在地	〒 885-0034 宮崎県都城市菖蒲原町 19-1 TEL0986-23-9547 FAX 0986-23-9549						
発行年月日	2015 年 3 月 27 日						
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	面積
		市町村	遺跡番号				
たなべかいたく 田辺開拓 第2遺跡	宮崎県 都城市 高城町 有水字 田辺1955番 63、64、78	45202	TJ5073	31° 53' 37"	131° 8' 34"	H25.7.29 ~ H25.9.13	525 m ²
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	調査原因		
田辺開拓 第2遺跡	散布地	縄文時代 弥生時代 古代 平安時代 昭和 21 ~ 34 年 (田辺開拓期)	付近	加栗山式土器 指宿式土器 市来式土器 北久根山式土器 弥生土器 土師器(高台付塊・壺) 須恵器(高台付坏身・壺) 打製石斧 敲石 剥片	鶏舎 ならびに 管理棟 建設		
要約	<p>田辺開拓第2遺跡は都城市高城町有水田辺(旧北諸県郡高城町有水田辺)に所在する。「鶏舎ならびに管理棟」建設に先立ち、本発掘調査を実施した。</p> <p>当該地は都城市中心市街地から北東方向に約 20 km 都城盆地北縁に位置し、高尾山の南麓、西約 1 km に大淀川本流が流れ、支流の田辺川沿いに形成されたシラス台地に立地する。北から南に傾斜する地形となっており、標高は 1 区が約 207.5 ~ 209m、2 区が約 203 ~ 204m である。</p> <p>今回の調査では当初、V 層上位の文化層(縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代)を調査対象とした。発掘調査の結果、II ~ IV 層で縄文後期土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器が出土した。また、流れ込みなどの二次的要因が考えられるが、縄文早期土器の加栗山式土器も出土している。遺構と断定できるものは検出されなかった。</p> <p>表土直下の II a 層上面で第二次世界大戦後の田辺開拓期烟跡と思われる耕作痕(耕起痕)が検出され、陸稲作が行われていた可能性がある。</p>						

都城市文化財調査報告書 第117集

田辺開拓第2遺跡

—鶏舎ならびに管理棟建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2015年3月27日

編集・発行 都城市教育委員会 文化財課

〒 885-0034 宮崎県都城市菖蒲原町19-1

TEL 0986-23-9547 FAX 0986-23-9549

印刷・製本 株式会社 文昌堂

〒 885-0004 宮崎県都城市都北町7166番地

TEL 0986-36-6600 FAX 0986-36-4660